

淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク活動報告 ー外来魚駆除とイタセンパラ野生復帰についてー

小川雅人・山本健太郎・吉田拓哉・中埜将太・鶴田哲也(大阪産業大学人間環境学部)

上原一彦・内藤馨(大阪府立環境農林水産総合研究所水生生物センター)

高田昌彦(琵琶湖を戻す会)

綾史郎(大阪工業大学工学部)

国の天然記念物イタセンパラを淀川で野生復帰させることを目標に、2011年8月に淀川流域で活動する市民団体と研究機関、企業、行政などが連携して「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク(略称:イタセンネット)」が設立された。2012年度からイタセンネットの本格的な活動が始まり、かつてイタセンパラの主要な生息地であった城北ワンドにおける保全活動、外来魚駆除釣り大会の開催、水辺の外来種対策リーダー養成講座、勉強会や成果発表会の開催、普及啓発活動等を行ってきた。本発表では、2013年度の定例保全活動の成果を中心にイタセンネットのこれまでの活動を報告する。

城北ワンド群の中の2ヶ所のワンドにおいて、2013年4月6日から11月17日の間に計14回、地曳網による外来魚駆除活動を実施した。その際、ワンドの魚類群集構造を把握するため、捕獲された魚については種毎に個体数を記録し体長を測定した。

地曳網による調査の結果、在来魚については計17種が確認された。調査時期により優占種は異なるものの、在来魚の中ではコウライモロコ、モツゴ、オイカワおよびカネヒラが多く捕獲された。一方、外来魚については計5種が確認され、オオクチバスとブルーギルの個体数が卓越していた。

外来魚の個体数比率については、4月から5月の間は32~47%であったが、6月から9月上旬の間は25~37%とより低い比率であった。ただし、7月6日の調査ではオオクチバスの稚魚が多数捕獲されたため、外来魚比率は64%と高かった。また、記録的な災害をもたらした台風18号の上陸直前の9月15日には、外来魚比率が45%と一時的に上昇した。しかしそれ以降、外来魚比率は低下し続け、定例保全活動最終日の11月17日には25%となった。

次に、これらの調査結果を2012年のものと比較したところ、2013年8月以降の外来魚の個体数の減少とその比率の低下は明白であった。このように一定の外来魚駆除効果が認められたことから、2013年10月10日には城北ワンドでイタセンパラの放流が実施された。

多くの人達の手によるこれまでの保全活動の成果が実り、イタセンパラの放流が行われたワンドでは外来魚の生息数は減少している。しかし、未だ大型のオオクチバスやブルーギルがこれらのワンドに生息していることも事実であり、外来魚の脅威が完全になくなったとは言えない状況にある。したがって、城北ワンドにおけるイタセンパラの野生復帰を成功に導くためには、今後も継続して外来魚駆除活動を実施していく必要があると考えられる。